香港

——とくに仲継貿易近年の動向——

向井梅次

香港はシンガポールと同じように、当初から自由港たることを声明した。全く無人の地に近かったが、忽ちにして一大港市となり、英国の対支活動の一大拠点となったのは、この根本的政策のお蔭とみられている。

一九三三年刊中華便覧[1]によると、「この港は阿片を除いて、一九〇九年まで全く関税がなく（remained free）その年いらい酒精類に税が加わったにすぎない。旅人の旅具も減多に検査されなかった（rarely examined）」といっている。

香港政庁の一九五九年商工年鑑[2]によると、輸入税や内国消費税の課せられるものは、炭化水素油・酒精・煙草・食卓用鉱泉水・メチールアルコールとなっていて、なかんづく煙草及酒類が関税の対象として大きい。

香港が永らく本命としてきた仲継貿易は、近年いよ〳〵衰微した（diminished entrepôt trade）と取沙汰せられ、その反面、日本輸出品の輸入制限を避けるため、香港経由（Via H'Kong）が一時は脚光を浴びたとも伝えられる。これについて一九五六年二月刊、植民庁の一九五五年香港年報[3]には、簡潔に左のように述べる。

「中国が朝鮮事変に這入って、中国との通商に国際的制限が加わり、香港は数カ月を出ずして、百余年依存し、また主たる繁栄の根源と目されてきた、巨大な仲継貿易（Great entrepôt trade）を殆どすべて喪うという羽目に陥入った。しかし乍ら、英植民相が去る八月当地を視察して香港住民に放送した言葉には〃すべてこれをもって香港の存立に対する脅威とするに代えて、香港はこれをもって、周知の機転器用さと怯まぬ弾力性とに対する挑戦として受けとった〃とある。仲継貿易は殆ど奪取せられ、当植民地はその精力を、製造加工業に切りかえた。この変り方が、いかに早かったかは、香港製（made in Hong Kong）の銘入り商品が、真実に当植民地において製造されたとは人々が信じがたいとする諸国が依然として多いことで分る。これまで香港では、よそのどこかで製造されたものにその商標を貼るのだという誤った非難をうけ、また香港を誹謗する者の言として、それは単に再輸出（re-export）するだけだといわれてきた。こゝにいまや、飜然として、仲継貿易地から一大製造工業経済へ（from an entrepôt to a largely manufacturing economy）急角度に転換は進捗して、一九五五年においても急速にすゝみつゝある」と。

（1）Crow, Carl; Handbook for China, Hong Kong 1933, p. 362
（2）Directory of Commerce, Industry, Finance, Hong Kong 1955, p. 70
（3）Colonial Report: Hong Kong, London 1955. p.2

このように香港は、伝来の仲継貿易と自らの工業的発展との二面に繁栄をもとめ、またその変遷に苦杯を嘗めてきた。いま少しく詳らかに、仲継貿易変貌の実情をながめよう。

香港政庁広報局の出した香港という冊子（刊行年次なし、一九五六年入手）[1]には、次のように記述している。

「香港の建設、発展ならびに窮極の繁栄にとって仲継貿易がその原因を成してはいるけれど、この植民地が通商の

一大中心として卓越するに至ったについては、右いがいの要因にも帰せらるべきものがある。歳入目的で設けた二三の税を除いて香港は自由港である。関税定率というものもなく、通商の制限は最小限度に止められている。中国人の勤勉、信頼さと誠実さとは、商取引上の契約履行ならびに財産保全と巧に符合しつゝ、悉く香港貿易の様式であり、その特徴でもある。

もう一つの有力な資産は、立派な銀行その他の金融施設で、これこそ当植民地の実際上全く大した〝インダストリ〟といっても然るべきものである。香港上海銀行（むしろ漢名は滙豊銀行という〔Hong Kong and Shanghai Banking Corporation〕）は、香港財界で一八六五年に設立したもので、今日も極東最大の銀行であり、世界的名声をもって知られているものである。

香港のビズニス・センターは、いわば〝リットル・ロンドン〟ともいわるべきもので、その施設・経験・業務および公正な取引などいっさいが、この都邑と結び付いている。香港上海銀行ビルの周辺は八大国の為替銀行、英米の保険会社、商事会社や海運会社の事務所が群がって居り、何れもその名が全世界に通っているものである。これらの銀行・保険会社ならびに商館は、香港をして東方アジアの為替金融および貿易の中心たらしめた、アジア関係の重大な要素であるのみならず、その意義はさらに遥に深長なものがあり世界の通商に影響するところの浅くないものである。ということは、香港が自由世界の殆どいかなる国とも通商するという事実である。概括して香港の貿易は、東洋の原材料と西洋の製造品とを交換することより成っている。香港二百五十万の住民が、それ自体一つの市場を構成し、その必需品の多くは外部に仰がねばならないといっても、この植民地の生きてゆけるのは国際通商によるほかないからである。

終戦直後の香港貿易の拡大こそ全く異常なものであった。一九五〇年がピークで輸入は四・四百万英トン、輸出は二・七百万トンに上った。金額でみると、一九五〇年の輸入四、八六四、〇〇〇、〇〇〇香港ドルと輸出三、七一五、〇〇〇、〇〇〇香港ドルに対し、一九五一年は輸入は四、八六四、〇〇〇、〇〇〇香港ドルと輸出四、四三二、〇〇〇、〇〇〇香港ドルに達し前年を凌いでいる。しかし右の数字は、世界的物価騰貴と朝鮮事変に伴う地場の見越し輸入や備蓄の結果であった。事変を理由に香港政庁が貿易上にコントロールを行った直接の結果として、一九五一年の貿易量は、一九五〇年より百万トン以上も減ったのである。中国に対する戦略物資輸入禁制のために、一九五〇ないし五一年のレコードは二度と繰り返えされなかった。

対中国貿易が極端な圧縮をうけたことは、香港によってシーリヤスな損失を意味する。国際連合において一九五一年五月に国際的輸出禁止を賦課するという決議を採択するに先だち、戦略物資の流れを禁止する必要については、これを承認し、受入れ、かつ大部分実施に移したのである。しかし香港の対中国貿易は、元来は香港存立の理由でこそあったけれども、歳月とともに僅かづゝ減少し、また別の市場においてこれを開拓してもいた。――香港の対中国貿易は、一九三八年において全貿易中の四〇％をしめていた。一九四八年には一九％に低下し、一九五〇年には三〇％に回復したが、輸入禁止以後、一九五二年には一六％に低下した――。中国は香港の主要市場として不可避的に残続すべきものであるし、また最も重要な貿易上の相手国であることに変りはない。香港土着の住民の食糧の大半が中国本土から得ているだけでなく、貿易に対する制限拘束を不当に永びかせることは、かれらの多くの活計の途を奪い、シーリヤスな失業を来し、不安の結果を斉らすことになる。

中国貿易の削減に処するべく、香港財界は調整を試みねばならなかったが、それは困難でもあり、また苦難の途で

あった。しかし香港マーチャントにとって、アブノーマルがノーマルであり、障碍苦難はたんに克服すべきものであるにすぎない。かれらは自信をもって今後の対策に直面し、世界最大のポテンシャル・マーケットの一つの中枢として香港は、極東の通商に必死の役割を演じ、香港をして一大仲継貿易地たらしめると同時に果敢に発展的な産業中心地たらしめるであろう。(both as a great entrepôt and rapidly growing industrial centre.)」と。

これは政庁のPRのための文辞たる半面も否定されないが、香港貿易近年の梗概を尽していることは認められる。さらに香港政庁商工年鑑[2]において、仲継貿易の項目の下、次のように記述している。

「香港の仲継貿易は主として、対中国入出貨に関係し、それには中国から輸入した物を再輸出前に選別仕分することと、他の諸国から輸入したものを対中国販売に先だち、倉庫保管し、分割小口販売することを含む。何れの場合にも、当植民地を経由したために実体的な変化を蒙ることは、僅少にすぎなかった。しかし、この事態はいまや一変した。しかしながら、仲継貿易商たちは、日頃の反撥性を発揮し、老練な活動を別途の経路にみつけだした。この十年間に、アジアの革命によって香港は、或る種の緊急物資を入手しうべき唯一の源泉地となり、関係諸国の物産に対して一つの市場を成すという事態を来していたから、現物在庫の供給(spot supplies)に当り、その間隙を埋めることにかれらは抜かりはなかった。

このような局面はもう終っているわけでもなければ、またかくあらねばならぬという十分な理由があるわけでもない。何故このようになったかについて、或る者は大に戸惑っているだろうし、また外国政府のなかにはこの貿易振りに敵意を示すものがある。香港物でないものを香港から買入れること(to buy non Hong Kong goods from Hong Kong)は、その物を直接に買入れるよりは道理上当然高くつくという理由を挙げるものもある。

単位　HK$million 項目は1958年再輸出額の順位による	1956		1957		1958	
	import	re-export	import	re-export	import	re-export
Textiles	921.5	539.0	941.5	384.9	732.8	315.1
Animal and vegetable crude materials	176.7	143.4	181.2	114.5	152.0	116.2
Fruits and vegetables	200.1	92.9	233.4	94.8	235.2	97.3
Clothing	43.3	41.3	62.1	51.4	65.1	88.1
Micscellaneous manufactured articles	99.0	73.6	108.0	73.8	100.9	85.2
Medial and pharmaceutical products	58.3	52.6	83.6	81.9	96.7	85.1
Cereals and cereal Preparations	275.5	54.4	287.7	44.8	335.3	79.0
Base metals	265.0	106.7	331.7	95.9	199.9	56.9
Manufactures of metals	59.8	51.0	66.5	47.9	63.1	54.2
Sugar, sugar preparations	83.1	47.0	91.6	54.5	89.8	45.5
Fish, fish preparations	84.6	24.4	93.8	31.0	115.9	43.5
Scientific instruments, photo graphie and optical goods ; watches and clocks	165.2	42.6	238.2	39.1	160.2	41.6
Transport equipment	81.3	32.3	114.8	36.4	77.8	39.8
Non-electrical machinery	122.0	50.0	177.8	34.0	170.8	39.4
Silver, platinum, gems and jewellery	98.7	33.4	106.7	30.5	109.2	38.0
Paper and paper board	117.5	71.4	130.5	51.6	108.3	37.8
Ores and metal scrap	15.0	62.7	59.7	85.9	8.4	37.2

Fertilizers	37.0	37.2	10.4	10.2	35.9	34.2
Dyeing and tanning materials	39.5	36.7	48.9	33.2	48.7	32.8
Explosives and miscellaneous chemical materials and products	56.3	18.6	78.6	21.8	80.9	31.1
Electrical machinery	82.4	22.2	99.5	21.9	105.7	30.6
Textile fibres	316.0	101.2	309.1	69.2	251.8	30.6
Non-metallic mineral manufactures	91.4	42.7	94.6	33.7	93.4	28.8
Animal and vegetable oils	78.3	35.3	89.4	41.6	54.7	23.8
Coffee, tea, cocoa and spices	52.9	28.4	61.7	30.1	49.1	20.4
Chemical elements and compounds	41.8	15.5	52.1	18.9	53.8	19.1
Dairy Products	84.3	16.3	100.8	14.9	102.4	18.2
Wood, lumber and cork	69.3	3.9	76.8	10.8	61.0	10.9
Oil seeds and oil nuts	40.3	39.2	34.7	18.5	29.8	10.4
Tobacco and tobacco manufactures	59.1	7.1	74.1	7.5	74.4	8.1
Meat and meat preparations	45.0	9.2	66.8	8.9	55.6	7.4
Mineral fuels	207.9	28.9	212.8	5.3	194.2	4.8
Live animals	162.9	0.1	178.8	1.0	231.8	2.1
Others	255.4	133.3	251.6	113.6	249.9	115.3
Total	4,566.2	2,094.9	5,149.5	1,814.3	4,593.7	1,728.5

しかし事実は、香港は依然として卸売商人のいっさいのサービス（all the services of a wholesale merchant）を全世界的規模において提供しているということである。すなわち、老練な仕入方法、低廉潤沢な融資、卓抜な貯蔵設備、大量購入品の分割小口売却、荷渡しの迅速、信頼の置けることが海上運送および保険のサービスに加うるに、通商の円滑な進展に極めて大切なことであるが、煩瑣な貿易上法規準則を最大限に免がれて真実全くの無税であるということである。全世界の貨物は香港市場において自由平等のベースで競争をする、これ以上、いい競争地は見出されないのである。

香港の仲継貿易で扱われる貨物は、その過不足や、価格や、海外諸国の貿易統制の変化に応じ、歳々年々、急激な変遷を辿ることも避けられないのは当然である。所掲表[3]で明かなように、仲継貿易最大品目は繊維品である。またそれが同時に、内国消費向き輸入品の最大項目でもあることは意味深い点である。衣類や雑貨製造品は引続き、仲継貿易上重要なものであるが、それも同時に、香港内製造品の輸出品目として主要なものである。香港のリベラルな、無関税経済に対して、これ以上の賞讃がありうるであろうか。このような貿易の二重性によって、海外諸地域に誤解をかもし、香港の製造工業地としての評判について誤報を誘発することになった。香港より輸出せられる物の原産地いかんという基本的問題は、香港政庁において立法的手段によって解決し、香港原産地の証明交付に関し、行政的コントロールの全網を傾けて処理するには、多大の苦闘をきたしている問題である。

伝来の仲継貿易と新しい仲継との比率について、右掲表の示すとおりであるが、伝統的に中国から香港が輸入し海外に再輸出せられるものは、動物性並に植物性原油、果実蔬菜類、医療品、穀物および穀類調理品、魚類及び魚製品、動・植物性油、製油用種子及び胡桃とである。絶対金額において、これらの品目の仲継貿易は、いわば驚異的なもの

であり、それ自身のものを保持して譲らないが、従来に比し、その重要性は幾分減退している。また前記表だけでは判然と現われないものに、対内向仲継貿易（inward entrepôt trade）の衰退が存する」と。

（1）Hong Kong, 香港。p.10
（2）前出 1959 Directory, p.18
（3）同じく p.19 より転載。

香港の対中国貿易の推移については、政治的要因も大いに絡んでいる。それには上海その他の中国諸港が、物資の捌け口（distributing centres）として重要性が逐減し、それが香港の地位を著しく引上げるに至ったことも指摘せられる。(1)

さらに国別貿易について主要相手国の比率はつぎのとおりである。(2)

	1938	1947	1951	1954
United Kingdom	6.9	7.3	9.0	9.1
U.S.A.	9.4	16.3	5.8	6.0
China	41.1	23.9	26.5	18.5
Japan	2.0	1.9	6.3	9.9
Indonesia	4.9	2.7	3.6	4.4
Germany	4.6	0.05	2.7	3.0

対中国貿易貨物の大宗は、いぜんとして食糧品である。一九五七年の商工年鑑には仲継貿易の項に(3)「第二次大戦直

後は中国の不安な政情と中共貿易の障碍とにより、貿易量は極減し、中国の輸入品の性質も一変した。それと同時に、極東を通じて政治的経済的転位を来し、それが香港の経済的自由と政治的安定と結び合い、香港商人は世界的地域的な専門知識を駆使して、従来とは別な型の仲継貿易（different type of entrepôt trade）を展開し、極東のあらゆる国々をそれに包含するに至った。かれらは全世界から貨物を購入し、またそれより幾分規模は劣るが、かれら自身の物産を売捌くため、香港をもってその仲介者（intermediary）として用い出した。

日本は世界通商復帰いらい、日本工業品の東南アジア売捌地（distributor）として、香港は重要な部署をしめたし、その他遠隔の諸国においても、大規模工業者において香港に特別の販売機関（sales agencies）を設けて地域本位の業務に当らせた」と述べている。戦前において、日本は例えば昭和九年に対香港貿易は、輸出において一・五％を、輸入は〇・〇六％を占めたにすぎなかった。[4] それがいまや、ときには米国につぐ重要相手国とさえ相成った。

さらに一九五七年の商工年鑑には、対中共貿易について[5]「中国の人民政府（People's Government of China）により統制経済が導入せられて、それが中国物産の呑吐港（clearing port）として香港の有していた地位に深刻な影響を及ぼした。しかし最近には、旧時のノーマルな貿易に復帰しつゝあることは、或る程度みとめられる。香港の輸出商は今や、地場の中国商人よりも中共の公的貿易機関より直接に大量買付けしている。これらの中国商人はかつて、小口で中国から輸入し、これを集荷し、選別仕分し、梱包し、かつ分荷していたものである。時には中国の公的な機関が香港経由で、香港の荷捌設備をたんに利用するだけで（merely using the Colony's transit facilities）輸出を試みることもある。何れにしろ、貿易の方法は変ったが、香港商人の専門知識は依然として残っている」と述べ、また一九五九年五月の香港貿易月刊 Hong Kong Trade Bulletin に載った香港総商業会議所会頭の前年度貿易回

顧談の中に「[6]香港の対日貿易が減少したのは、米国を原産とする貨物の対日再輸出が減ったことと、日本製品の香港経由対インドネシヤ再輸出が凋落したことに基く。香港の日本繊維品購入は、これまた著減した。

しかしこのような増減はあっても、東南アジア、とくにマラヤおよびシンガポールとの従来の貿易には変りはない。香港にして引つづき、生活の少くとも半ばを工業の発展によって稼がうとするならば、製造品市場を求めねばならず、それにはもっと高度に発展し、比較的より高い購買力をもった国々をさがすべきである。そうした意味合で、ヨーロッパの自由貿易地域のようなものは関心を抱かざるを得ない」と。

(1) 1955 Directory, p.3
(2) 同じ。
(3) 1957 Directory, p.74
(4) 三菱経済研究所・日本の産業と貿易の発展、昭一〇、六一〇頁。
(5) 1957 Directory, p.76
(6) Chairman of the Hong Kong General Chamber of Commerce, on Hong Kong Trade. p.122

ゆらい香港は、巨大なアントルポー(unimmense entrepôt)であり、[1]また重要な自由港であり貿易地(Wichtigster Freihafen und Handelsplatz)であるといわれてきた。[2]その貿易は、entrepôt trade といゝ、仲継貿易と称している。

Entrepôt はフランスにおいて保税倉庫を意味し、commerce de entrepôt は、ドイツの Zwischenhandel に該当するところから、仲継貿易と訳せられるに至った。

香港が当初から標榜したところの自由港(free port, Freihafen)は、船舶の出入、貨物の輸出入を比較的自由に

して、とくに通関上の手数を煩雑ならしめない制度をいゝ、香港が自由港政策をとって entrepôt trade を奨励し、歳月の久しき、貿易の内容・実質においても、変化あるを免がれない。近来日本でも、単に貨物が第三国を通過するだけでなく、それに製造加工を施すことを重視するところから、entrepôt processing trade を通産当局の加工貿易の英訳に用いる例もみうけられる。

例えばまた、日本向け貨物を積んだ船舶が、香港を終点とし、日本までゆかない場合、香港で一旦陸揚げし、または陸揚げせずに、第二の船に積換えて日本へ運送することがある。これを transhipment ――古くから〝接続〟というタームを用い、近来は積換えともいう――と称し、このような接続貨物のため、香港の港湾業務が殖えるには相違ないが、その範囲や程度は限られている。香港の港湾設備や作業は、このような接続貨物にも適していることは論ないが、単なる通過でなく、仲継をもって主眼とする。しかして仲継には、自由港の区域内で、製造加工を行わせるものがあり、たんに売買や海運・保険等のサービス本位になることもある。Entrepôt は、政府の関税賦課を猶予せられるところの保税倉庫だけでなく、貨物を大量に集積し、最終市場に分散輸送するべき一大貿易中心地（Great-commercial centres）の意味で用いられることもある。[3] 従って entrepôt trade の意味するところは、全く巾のひろいものといえる。

（1）Larousse Commercial, Paris 1930. p.732
（2）Meyers Lexikon, Lpz. 1938. Hong Kong
（3）J. Stephenson, Bedrock of Modern Business, London 1929, p.783

香港工業の伸張は、仲継貿易転位の反面でもある。

一九五八年現在、工業を営む事業場は四、九〇六の登録数で、一七九、九九七人を雇用し、その内女子は七一、一五三人である。業種別雇用数は左のようである。[3]

繊維（衣類を含む）	七〇、五七〇	食品及煙草製造	九、五〇〇
金属工業	二四、四〇〇	印刷、出版、製紙	九、〇〇〇
造船業	一〇、〇〇〇	護謨製造業	八、八〇〇

上記のほか漁業六四、〇〇〇、農業二〇〇、〇〇〇と推定される。

香港工業が一躍拡大したのは、一九四五年後であり、それには中国から工業家が香港に投資を求めたことや、日本が一時東南アジア市場から隔在したことが、特殊な原因として挙げられる。繊維工業は筆頭で、紡績工場の総錘数は三五〇、〇〇〇錘である。エナメル工業は二〇工場を算する。精糖工場は早くも一八八四年に始まっている。藤製品（rattan household articles）のように世界的に好評を博している特産もある。

香港は自由港であることとともに、シドニー港やブエノス・アイレス港とともに、世界最大の美麗な港に算えられる。その意味で一大観光港であり魅惑的な港市である。香港はまた、戎克の町（junk cities）の一つである。香港総人口二百五十万のうち最低一一五、〇〇〇人は水上生活者（water people）だという。これには海洋を航行する戎克のほかに、全く小型のサンパン（tiny sampan）を含める。これらの生粋の水上生活者は広東人かまたは福建州出身の海のジプシーといわれるホクロ（Hoklo）人の何れかである。ホクロ人は殆どすべてサンパン内に住み、クリークにも香港湾の何処にもみかけるものである。[1]

香港の港域は、戎克によって彩られる。わたくしが往年、公共碼頭（Public wharf）と英漢両文で認めた桟橋に

佇立したときも、五、〇〇〇屯級の英国貨物船が入港し汽笛をならしているし、他方には一隻のサンパンは小女の漕ぐ櫓によってこの公共碼頭に着くところであった。舟中には、母親らしい老婆がご飯を焚く釜を見ている。また舟中には幼児を背に負うた小娘もいる。折しもカメラを提げた洋人が碼頭についたモーターボートに飛び乗る。万国旗を掲げたように洗い物を乾しているサンパンや大型戎克も港内を通ってゆく。全く戎克なしには香港は考えられず、風光明媚なことゝ戎克とに香港の特色は窺われるという感じを抱いたのであった。戎克のあの巾の広い帆は今日は珍らしいものといえるであろう。

香港水域の管理は香港政庁海事局（Marine Department, Hong Kong Government）の分掌するところで、船舶の入出港手続は海事局にする。港湾諸設備は同じく商工局（Department of Commerce and Industry）の管理下にある。香港は近代的港湾設備を有し、多くの主要港で徴している屯税（tonnage dues）は、入港船舶には賦課しないが、燈台税（light dues）を徴する。

香港の港湾は、正式には Port of Victoria, Hong Kong という。しかし、ビクトリアの名は殆ど用いられないで、普通は Port of Hong Kong といっている。ただ公文書に Port of Victoria と書くだけである。

香港は入出港にあたり、水先案内を強制しない。自由港ではあっても、船舶の入出港は検疫、バース（指定繋船位置）その他の手続は、厳重に政庁の監督をうける。税関はあっても、うるさく取締らないだけである。

香港に寄港する海運会社は、商工年鑑に七頁にわたってリストが出来ているように[3]世界の主要船会社を網羅している。これらの外航船の繋泊に適する十分な施設を整えている。一九五八年の入出貨扱高は、じつに二千七百万トンに達した。埠頭会社や倉庫会社で大きいのは四社あり、なかんづく Hong Kong and Kowloon Wharf and Godown

Co, Ltd. が最大であり Kowloon 九龍は香港島の対岸にあり、むしろそこに埠頭会社倉庫が多い。また空港も、九龍にある。冷蔵倉庫は、Dairy Farm Ice and Cold Storage Co. Ltd.（漢名牛奶公司）総貯蔵力三二、二六六屯、市中にレストランを経営し、牧場養鶏場も所有して、冷蔵倉庫というより食料品業（food specialist）を標榜している。

香港も、シンガポールと同じように、倉庫をゴーダウンといっている。この場合には、冷蔵倉庫を含まないようである。前記の Hong Kong and Kowloon Wharf and Godown Co. は普通倉庫の貯蔵力は五〇〇、〇〇〇屯、艀隊は八、〇〇〇屯に及ぶ巨大埠頭公社で貴金属、その他の貴重品を納れる Treasure Room の設備がある。この貴重品保管倉庫は五百屯の保管力がある立派な倉庫で、貴金属、時計宝石類などの寄託を引受け、ヨーロッパ人およびアジア人の警務員を使って保管の万全を期している。香港は今日もなお、盗難や抜荷の絶えないところで、ヨーロッパ人の警務員は信用を博する手段であり、香港の場所柄、このような貴重品倉庫は採算もいゝのであろう。

香港は終戦後、港湾労務者争議が全然ない。[4] 世界の有力港において、港湾労務者の争議の絶えてなかったのは全く僅かである。

（1） 1959 Directory, p.61
（2） Colonial Report 1955, p.29
（3） 1959 Directory, p.39 その他各年。
（4） 同じく p.38

第二次大戦前後、香港の蒙った激変は、つぎのような人口の著しい変遷にも窺われる。

一九三八年日本軍が広東を占領し、無数の逃避者が香港に溢れた。政府は一九三七年に一〇〇、〇〇〇人、一九三八年に五〇〇、〇〇〇人、ついで一九三九年には一五〇、〇〇〇人の逃避があったと推定し、香港の総人口は一、六

〇〇、〇〇〇人となった。[1]

終戦直後、一九四五年八月には六〇〇、〇〇〇人に減じ十八ヵ月後には一、〇〇〇、〇〇〇人が香港に復帰し、一九四七年には総人口は一、八〇〇、〇〇〇人、一九五五年鑑によれば、二、八〇六、〇〇〇人と推定している。一九五六年末に筆者が滞在したとき、ホテルの断水時間の長いのには参った。それも人口急増の結果であった。

香港は久しく外国為替の市場でもあった。香港は一九四一年八月いらい、Sterling area に這入った。香港ドルは、一九五三年後半の平均は左のとおりであった。[2]

United States $ 1 = HK$ 5.71

HK$ 1 = 17.5 cents

United Kingdom £ 1 = HK$ 16

HK$ 1 = 1s. 3 d.

香港一ドルは、こゝに六三円とみて、香港住民の生活程度をみると Salaries Tax といっている所得税について[3]

基礎控除 personal allowance $ 7,000

扶養控除　妻女 allowance for wife $ 7,000

子供 child allowance ranging from $ 2,000 for the first child to $ 200 for the ninth child

とし、課税純所得（net chargeable income）五、〇〇〇ドルに対して税率五分の一から、四五、〇〇〇ドルを超ゆる課税純所得はこの倍とする。子供二人四人家族に対する控除額は約一八、〇〇〇ドル、邦貨換算一一三万円余であ

るから、給与生活者は比較的恵まれているといえる。総人口の九割を占める中国人には、なおスラム街に居住するものの多いことを認めた。地域が狭隘であるし、日本の諸港と同じように、香港の埋立事業は旺盛である。

（1） Colonial Report 1955, p. 219

（2） Hong Kong Government Public Relationsoffice, Hong Kong, 香港　所載による。

（3） Colonial Report 1958, p. 43

香港は港のお陰で発展したのであり、港として秀でた風波の遮蔽地はある。しかし一九〇六年香港の台風禍は、港湾災害として著しいもので、死者万余に達し、大陸と香港島との交通は数日間、遮断された。政庁はこのため、特に防波堤を築き、台風時の船舶繋留法を講じたりした。

また一九三七年九月二日、香港周辺を襲うた台風も大きなもので、そのとき香港にいた二九隻の船舶は、或は座礁、或は衝突、その他の事故を免がれなかった。当時の風速は毎時一六七マイルであった。

右の数十隻のうちに、当時太平洋最優秀の客船浅間丸がいた。香港の Taikoo Dock Co. の乾船渠にあり、その後同船渠の桟橋に繋がれていたが、台風の警報が出たから、Junk Bay に進みて錨泊したが、同じ湾には五隻の船舶が避難していた。浅間丸は強風のため、ついに九月二日 Saiwan Bay 北西部において座礁するに至った。船底の三分の一は堅固な岩石に乗上げており、残り三分の二は円石、砂土の上に乗り上げていた、被害は予想したより少なかった。日本サルベージ会社は直に救助に着手、翌三八年三月十一日浮上げに成功、香港ドックで一応仮修理を了えて長崎の三菱重工業船渠に這入った。救助費総額二百万円で予想より遥かに少くてすんだのは、海難救助作業の優秀に帰せられるとともに、遭難場所が香港に近く、香港政庁の援助も与っていたといわれる。

このような天災の他に、政治的トラブルはその位置よりして避けがたい。一九四一年のクリスマスには日本軍香港占領、その解放までの間を別として、一八四一年いらい今日まで、一九二二年の海員争議、一九二五年六月のジェネラル・ストライキをはじめ、幾つかの暴動を体験しているが、それもシンガポールやマラヤの比でない。東南アジアの諸国に比し香港の経済的安定は全く別な趣がある。Handbook for China にも including Hong Kong と副題しなければならなかったのは、中国にして中国にあらず、香港の特異な事情に負う。

香港の仲継貿易がしだいに性格を変えつゝあることは前出のとおりで、それには原産地証明の発給や商標などの技術的問題を生じた。

原産地証明書（Certificate of Hong Kong origin）を必要とする事由は、必ずしも一様ではないが、そのため政庁としては、莫大な人手を要したといっている。

香港は英国の商標法（一九三八年）に基き、商標令（Trade Marks Ordnance 1954）を制定した。戦時中日本軍の占領下、戦前になされた商標登録簿はいっさい喪失し、同令により新らたに登録を要することに定めた。

とくに意匠については、登録の制度はないが、英国の意匠令（United Kingdom Designs〔Protection〕Ordnance）に基いて英国で意匠登録のすんだものは、これを香港で登記すれば英国と同一の保護が与えられる。

工業の拡大に伴い香港は、輸出促進に大に力を入れ、各国の見本市参加は固より、あらゆる機会を逃さないように努めている。例えば、オランダの Royal Interocean Lines の m. V. Ruys 号に、香港製品の展示室を設けることに成功したのもその一つで、この船は香港――南阿――南米を航行する。

香港の貿易は、前出のように政庁もみとめているが、諸国の敵意ある措置に対抗しなければならなかったりいわゆ

る正常貿易から眺めて問題たるものは多い。昭和三一年には、日本・香港間に税関監督官を相互派遣し合って密輸防止に努めたりした。香港の仲継貿易の転位や自由港政策について、官辺筋の所見は既述のように現状楽観的な分子が多いけれど、これに倣ってか米国は、Foreign Trade Zone 施策において、ヨーロッパ諸自由港憧憬多年の夢を実現したといっても、その成果のさしてみるべきものがなかったに拘らず、昭和三十四年十月一日には沖縄に自由貿易地帯を設け、すでに二つの倉庫を用意し、沖縄経済局当事者も日本の協力を要望したと伝えられる。英国の香港自由港に対し、沖縄は米国系の entrepôt たる含蓄がみとめられる。